

---

# 雪風のZERO

黄昏れた人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雪風のZERO

### 【Zコード】

Z0170M

### 【作者名】

黄昏れた人

### 【あらすじ】

覚える能力を得たサイトが、タバサの使い魔になつて生活する物語。

かなり後でスパロボの技が出るかも知れません。

## 人物紹介

タバサの母親の名前が原作に出でていなかつたので、セレネにいたします。

### 人物紹介

タバサ（シャルロット・エレ・ヌ・オルレアン）

シャルルの愛娘で、トリステイン王国、トリステイン魔法学園に留学している。ゲルマニア出身のキュルケとは仲がよく親友と呼べる仲である。

### サイト（平賀才人）

シャルルにかつて召喚された少年。シャルルが、死んで埋葬された時に現代に戻つた。年は召喚された頃の年齢に戻つてり現在は16歳の普通の高校生。スパロボにはまつていた。

再び召喚され、使い魔のルーンは、胸にイーヴァルディー、あとは両手に刻まれており右手のルーンがメイジの魔法を覚え、それを自分で変えて使うという能力。左手のルーンが自分の成長につれ能力を覚えていく能力。最初は炎の能力を持つている。

### シャルル（シャルル・オルレアン）

今は亡きタバサの父親で元サイトの主人。

### セレネ（セレネ・オルレアン）

シャルルの最愛の妻であり、シャルロットの母親。魔法の薬で、心を失つてゐる。

### アダム・ブレイド

サイトのルーンの使い方を教えた謎の神父。

イヴ・ノイシュヴァンシュタイン

アダム・ブレイドと共にいた、少女。人の名を覚えられず、勝手にあだ名をつけてしまう。

クルス・シルト

アダム・ブレイドと共にいた、少年。イヴに「山田」と呼ばれている。

照山最次

アダム・ブレイドと共にいた、男。イヴに「内田」と呼ばれている。

## 第1話再会

タバサ・side・

あの日から、どれだけの時間がたつんだろう。

母様が心を壊されて、父様がジョゼフに殺されて、あの人気が消えてしまった。私が幼い頃からずっと一緒に居てくれた人、平賀才人。

「タバサ、そろそろ始まるわよ」

今日は、学院の使い魔召喚の儀式の日。私は何を召喚するんだろう。

「次、ミス・ツェルプストー」

「はい」

次はキュルケの番、その次は私の番。

「やつたわ。飛竜山脈のサラマンダーだなんて」

サラマンダー、キュルケに相応しい使い魔だ。次は私の番。この儀式に偽名を使っても、成功するのかな・・・

「次、ミス・タバサ」

私の番だ、早く終わらせて本が読みたい。

「我が名はタバサ、五つの力を司るペンタゴン。我に従いし使い魔を、召喚せよ」

これでゲートが開いた、私にはどんな使い魔がくるのかな・・・

「ふう〜」

今日の練習も終わった。

あの日から、どれくらいたつたのか、親友を無くし戻つて来たら召喚された時の歳に戻つていた。

今は高校一年、16歳だ。と言つても、学校には通つてゐるわけではない。通信制でやつてゐるからだ。

今でも複雑な気持ちだ。向こうでは、すでに20年近くいた訳で、こつちに戻つたときは自分は幼くなつていた。中学に入る時に両親に向こうでの生活の話をした。最初は信じてもらえなかつたが、俺が真剣だということがわかつた両親は、この話を信じてくれた。本当は、まだ疑つてゐるんだろうけど・・・

中学の頃から有名な剣道の達人の元でお世話になつてゐる。

「平賀、少しいいか

「はい、何ですか？先生」

「お前のことは両親から聞いてゐる。正直、今でも私はあまり信じてはいない。しかし、向こうにお前の守りたいことがあるのなら、お前に渡しておきたいものがある」

「何ですか？渡したいものつて

「来ればわかる」

そう言られて、先生に付いて行つた。そこは、いつも練習をしていた道場だ。しかし連れて行かれたのはその道場の奥の部屋。そこには一本の日本刀があつた。

「先生、これは？」

「これは、この道場に代々伝わっている刀だ。これをお前に譲りたいと思う」

「そんな！そんな大切な物を頂く訳にはいきませんよー！」

「私はな、お前を最後の弟子にして、この道場を閉じようと思つて いるんだ。それで、この刀をお前に譲りたい。大切なものの為に使つて欲しいんだ」

「先生・・・わかりました。その刀大切にしたいと思ひます」

そう言つて先生から、刀を渡された。刀を抜いて見ると、未だに切れそうな立派な刀だ。

「・・・平賀、迎えが来たようだ」

「え？」

後ろを見ると、いつぞやの時のゲートがあつた。

「両親には私から言つておこう。行つて来い、我が最後の弟子よ」「はい。入つてまいります」

そう先生に言い残し、俺はゲートを潜つた。

気がついたら、白い空間にいた。そして、前から男3人と女1人が歩いてきた。

「あんたら、誰だ？」

「ああ？俺か、俺はブレイド。アダム・ブレイドだ」

「僕は、イヴ・ノイシュヴァンシュタイン。長いからイブ・ノイシ ュヴァンシュタイン様つでいいよ」

「 「 「 増えてる増えてる」「 」「 」

「僕は、クルス・シルトといいます」

「俺は、照山最次だ」

いつたいここはどこなんだ? ハルケギニアには、こんな場所無いと思つが・・・

「お前は?」

「あ、俺はサイト。平賀才人だ」

「じゃあ駄して田村ね」

「へ?」

「イヴさんは名前を覚えられないんです」

なるほど、だから勝手に名前を付けるのか。

「さて、時間がない。簡単に説明してやります。俺達は、貴様がこれから身に付ける能力を教えるためにきた」

「これから身に付ける能力?」

「お前が召喚される世界の話だそうだ。詳しい事は俺も知らん」

知らないって一体何なんだ。

「お前が身につける能力は、『覚える能力』だ」

「覚える能力? 覚えるって何を」

「あらゆる能力を覚える能力だ。後は自分で確かめることだな。そろそろ行け坊主

「あ、ああ」

よくわからないけど、まあいいか。

「行つたか」

「よかつたんですか？神父様。本当の事を言わなくて  
「ああ？山田あ、貴様はいつから俺様に質問できるようになつたん  
だあ？」

「いや、山田の言つ通りだ。本當によかつたのかよ、プレイド」  
「ちつそのほうが面白いじやねーか」  
「」

タバサ - side -

・・・・これは、夢？

「嘘！？タバサが平民を！」

「タバサが平民を召喚したぞ！」

目の前にいるのは、黒髪を男の人。でも彼は・・・

「サイ・・・・ト・・・・？」

「ただいま」

「サイトーサイトサイトサイトー！」

間違いない、サイトだ。帰つてくれた。

いきなり泣きながら抱きついてきたシャルロットを優しく抱きしめる。

今はタバサにて名乗ってゐるか……

「あ、あのミス・タバサ。できれば早く儀式を終わらしてくれないかね」

この教師だろうか、頭が寂しい教師だな。

「タバサ。先生も困ってるみたいだから早く契約してくれるかい?」「・・・わかった」

「ううん、まだ日が赤いけど今は気にしていらっしゃないよ。」

「我が名はタバサ、五つの力を司るペンタゴン。」の者に祝福を与  
え、我が使い魔となせ」

契約のためのキスをする。タバサとのキスは涙の味がした。  
シャルルの時はどうだかつて？思い出したくもない・・・・・  
鬱鬱になる・・・

ルーンが刻まれてるのか！さすがに痛い！両手の甲と胸ってなんでだ！

「ぐつはあ・・・・はあ・・・・」

「サイト、大丈夫?」

「ああ。大丈夫だよ」

しかし、三箇所にルーンが刻まれるなんて、どうなつてんだ。

「ルーンを見せてもらつてもいいかね?」

「ええ、いいですよ」

「これは珍しいな三箇所に刻まれているなんて。両手のルーンは見  
たことがないが、胸のルーンは『イーグアルディー』かね

「『ゼロ』」

「む、今なんと?」

「このルーンの名前です。その力は『覚える』能力です。詳しくは  
俺も知りません。今、頭に流れました」

今、左手のルーンが少し光つたような、それと同時に炎の使い方が  
わかつた気がする。

「それは興味深いですね。あとで話を聞かせていただけますけな?」

「ええ、いいですよ」

「それでは、後ほど。次・・・」

教師の人と話をして、俺とタバサは少し離れたここまで歩いた。  
そして、またタバサに抱きつかれた。それと同時に真っ赤な髪をし  
た女性が近づいてきた。タバサの友達かな?

「あなたがタバサの使い魔ね。ふうん、お名前は?」

「平賀才人。サイトって呼んでくれ」

「サイトね。わたしは、キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フオ

ン・アンハルツ・ツェルプストー。キュルケって呼んでね。しかしそういたわね。タバサが男の人に抱きつくなんて」

それでもかなりの美人だな。特に胸とか・・・

ゴンツ

「痛つ！何すんだよタバサ

「・・・

「うひごめんなさい私が悪かつたです」

す「ぐ冷たい目で見られてしまった・・・

タバサ・side・

まさかサイトが来てくれるんなて思わなかつた。でも・・・うれしい。

「タバサ～いつまで抱きついてるの～

さすがに抱きつきすぎたみたい。もしかしたら、私顔赤いかも・・・

ドカーン！！！

「なんだ！」

爆発音が聞こえたのと同時に、サイトが腰に付けていた剣に手をやつたせいで、私はさらこきつくサイトに抱きつく形になつた。嬉しいけど、苦しい・・・

「サイト、タバサが苦しんでるわよ

「え、タバサごめん。大丈夫か？」

「大丈夫。さつきの爆発はルイズ？」

「やつみたいね。どんな使い魔を呼んだのかしら、見に行きましょ」

キュルケは楽しそうに行つてしまつたので、私たちは後を追つてついて行つた。

キュルケ・side・

さてさて、ルイズは一体どんな使い魔を召喚したのかしら。

『わあおあああ！』

『さやああああ！』

な、何今の悲鳴は！何かあつたのかしら！？

「ゼロのルイズがエルフを召喚したああああーー！」

「エルフですって！？ああもうーールイズつたら、よりこよつてエルフを召喚するなんてー！」

まさかここで戦闘になるとか言わないわよね。

「あのエルフ、敵対意識はないみたいだけど。つてタバサ、なんで離れてくれないんだ？」

確かに敵対心はないみたいね。それにしても、タバサがあそこまで心を許すなんて、一体あの二人はどんな関係なのかしら。

サイト・side・

エルフを召喚する女の子が、少し気になるが今は問題ないだらつ。

「今日の授業はここまで、生徒の皆さんには自分の使い魔としつかりとスキンシップしてください」

「どうやら今日の授業が終わったのか、他の生徒は皆自分の部屋に戻っているな。

「どうりでサイト。その剣何？」

「あ、これが？これは先生にもらった剣なんだ・・・ってあれ？」

「どうかしたの？」

「なんでだ、どうなってるんだ。」

「剣の形が変わってるー。」

「「え？」」

先生にもらったときは確かに日本刀だったのに、じつに来たら剣  
自体の形が変わってるなんて・・・

「その剣について後で調べてみる。今は部屋に戻る」

「え、ああ。わかった」

-----  
移動して、タバサの部屋に着いた。

「やっぱリタバサは本が好きなんだな。昔と変わらないよ」

部屋についてみたら案の定、本でいっぱいだった。ベッドも洋服ダ  
ンスもシンプルだ。

「昔と変わらない訳ない、私は変わった」

「やうだよな。ごめんな、タバサ勝手にいなくなつて」

そう言つとタバサは抱きついてきた。俺は、何も言わずにタバサの頭を撫でた。

「一人だけのときはシャルロットって呼んで、お願ひ「わかつたよ、シャルロット。約束だ、もう勝手にいなくなつたりしないよ」

「約束」

涙田で上田遣いしてきた。そのときなぜかドキッとしてしまった。落ち着け俺ー！シャルルの子だぞ、キドキじいじすんだ！

「そろそろ寝る」

「や、そうだな。とにかく俺はどこで寝ればいいんだ？」

そつぱうひとタバサは、ベッドを指差した。

「それは？」

「ベッド」

「それはわかるけど、なんで一つしかないベッドを指差すんだ？シヤルロット」

「こつしょんむ」

あ～昔みたいに一緒に寝るのか、それなら納得……しかしも黙目だめ

「あのなシャルロット。年頃の女の子が、そんなこと言つちやだめだぞ」

「サイトは私と寝るの、嫌？」

うつ上田遣いのタバサを見たら、かなりドキドキしてしまった。頬が少し熱いのがわかる。

「あ～わかったよ。一緒に寝るからそんなにするな」

「うそ」

「つづまたドキドキした。なんなんだい？？？」

タバサ・side・

久しぶりにサイトと寝れる。少し、嬉しい。。かな。。

「あ、そうだ」

「どうかした？」

「明日の朝、ルーンとあの剣使つてみるけど、シャルロットも見てみるか？」

サイトのルーンは気になるし、あの剣はもつと気になる。  
前に読んだ本に、あれと同じ剣が書いてあつたような気がするけど。  
・・・がうのかな。

「私も気になる。明日は休みだからちょっとここ一

「そつか。じゃ明日だな」

そつつかサイトは、頭を撫でてくれる。これも久しぶり。

「それじゃお休み。シャルロット

「お休みサイト

「これが、どんな生活になるんだ？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0170m/>

---

雪風のZERO

2010年10月9日03時53分発行